

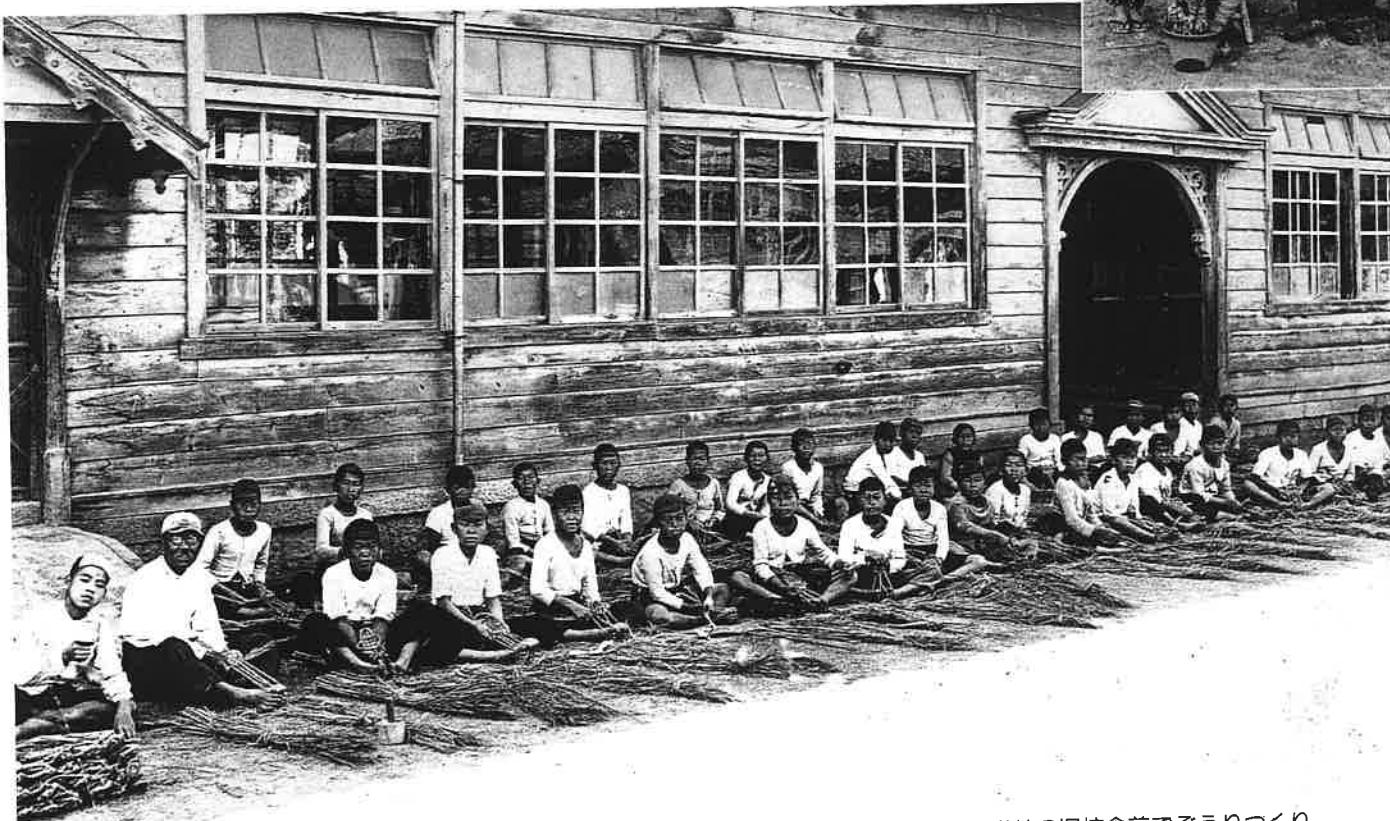
戦争が日毎に厳しくなってきた早春の朝、出征する息子を囲んで、記念写真を撮る光景が村ではよく見かけられた。

また小学校（当時は国民学校と言った）の卒業式では、「揚げば尊し……」の練習をしていたのに、急に「海行かば……」に変更させられた。「海行かば」を歌って巣立った日から50年がたった。

戦況が深刻になってきた昭和19年頃からは、授業どころではなく児童は出征軍人の留守宅に行き、農事の手伝い、落穂拾い、麦ふみ、そうりづくり等の勤労奉仕の毎日であった。この南校舎【写真下】も、間もなく飛行場建設作業の奉仕にきていた勤労報国隊の宿舎として使用され、その後航空隊が講堂、校舎の一部に駐屯し、航空の要務についていた。

あれから50年……私達の周辺は大きく変わってきた。

あれから50年……



小学校の旧校舎前でそうりづくり

水沢地区の人口 総数……3,709 男……1,801 女……1,908 世帯数……1,011 (7.3.31現在)

発行 四日市市水沢地区市民センター

編集 水沢地区社協広報部

平成7年4月25日

横堀開拓五十年

水沢町の横堀地区は、終戦の昭和二十年に
初代入植者十五戸が開拓に着手して、満五
十年を迎えました。現在二十五軒となった
同地区の人々が、初代開拓者の方々の努力
をたたえ、「開拓五十年記念事業」を計画。
記念碑を建立、記念誌を発行して、四月十
六日には記念パーティーを催しました。



立派に完成した記念碑



第二次世界大戦が終わって
から、日本の社会は、大きな
変革を体験しました。

良かれ悪しかれ、戦後五十
年は、日本の再構築という意
味で重要な時代であったこと
は確かです。

今年、水沢町の横堀地区は
開拓五十年を記念する事業を
催しました。

戦後日本では農地改革がす
められ、水沢でもいたるところで開墾が行われました。
その代表的な例が横堀地区で
す。

世間では、戦後五十年を記
念した行事が催されています
が、広報すいざわでは、五十
年を振り返った写真をさがし
てみました。



昭和20年代の乗合自動車



入植当時のさつまいも畑



当時のお茶畑



50年前の水沢のなつかしい風景

記念誌発刊

横堀地区二十五軒のうち初
代入植者は七軒。開拓時代の
苦労や、この五十年の歴史を
直接語る人も少なくなりま
した。そのため今回、記念事
業の一つとして、記念誌が発
刊されました。当時の苦労話
あるいは、新しく当地区に転
入された方などの感想や、懐
かしい写真などが、掲載され
ています。

「飽食時代に思う」
上村 勇
戦前、私の両親は名古屋に
住み、米穀雑貨商を営んで
いました。戦争で焼け出され
終戦直前に戦火を逃れて現在
の土地に入植しました。当時
三歳の私は、六人兄弟の末っ
子で、両親は幼い子供たちを
連れて、全く経験のない農業
に従事するまでの過程には随
分悩み、苦しんだことと思っ
ます。

入植当時、原野に近い痩せ
地の山を開墾し、切り株を一
株ずつ掘り起こす日が幾日も
続き、やがて作物が出来るま
でには数年を費やしたそうで
す。当時は食糧事情が悪く、
栄養失調に近い状態での作業
はとても辛かったと思います。
物があふれ、ぜいたくに慣
れ、物の価値観がうすれてい
る現代では、想像もつかない
ことだと思っています。



輝いています この人 福祉施設の看護婦さんとして がんばっている

四ツ谷町 清水 広美さん

八年前、全国手話通訳問題研究集
会が石川県金沢市で開催されました。
ご主人の邦彦さんも四日市市代表
で出席していて、会場で隣りあわせ
に座ったのが、運命の出会いだっ
たそうです。舞鶴市の医療現場の第一線
で活躍していた彼女でしたが、遠く
離れた水沢へ嫁いで二人の男の子に
恵まれ、子育てに専念していました。
そして昨年四月より福祉施設の看護
婦さんとして復帰されました。



「毎朝検温、脈拍から始まり、行
動を見ながら、顔色はどうか、昨日
と違ったところはないか、一人で担
当する人数が多く多忙な毎日を通
過しています。全国的にも看護婦の絶
対数が足りない傾向にあり、資格を
持つ人が増えることを願っています。」
と苦労を語ってくれました。

水沢夜ばなし 豊田くにゑ

「とよ爺さん」

むかし、とよ爺さん、おすえ婆さんは、長年、北谷の子供た
ちに、集まり場を提供してくれて、夏は冷たい井戸水を、冬は
たき火の温もりを、どの子この子の隔てなく、ごちそうしてく
れたもんさ。

また、子供たちも「お爺、お婆」と、なついて学校へ行くも
帰るも立ち寄るのを、当たり前のようにしていた。

喧嘩の仲裁から、危ない遊びの注意、子供たちが学校へ行く
のに遅刻せんようにと時計を見ていて「さあ、皆そろったかや、
ぼつぼつ行けよ」と、声かけてくれた。また、遅れてきた子に
は「今、行ったとこや、一寸急ぐと追いつくぞ」とはげまして
くれた。

寒さ厳しい冬の朝、ほだ火のあつ灰に小石を暖めて、ふる新
聞に包んで着物のほどころに、または服のポケットとかに入れて、
暖かさを、やがてほのかに温もりを楽しみながら、学校へ
急いだのも懐かしいなあ。

夏の「ぐみ」秋の「いちじく」冬の「ニッキ」など、遊びに
来とる者、皆がもうて食べたもんさ。

毎年、毎年、こうして子供達の世話をしてもらったどの子の
親も、柴一わ、割り木一わ持ち寄るでもなく、顔を合わせたお
り、「子供達が、いつもお邪魔して、すまんことだなあ」と
礼を言うだけ。

子供達の集まり場、提供は、おそらく、お爺の長男が学校へ
行くようになってからと思うが、今となっては、さだかでない。

折りにふれて昔話を聞かせてくれたり、当時の山里には、珍
しい蓄音機を聞かせてくれたり、ものしずかで、子供達に限り
ない慈しみを、人には常に笑顔のいい人だったが、昭和20年夏、
永眠された。とよ爺さんは安政3年生まれ。

私がお小一年生の頃、学校
での出来事です。お爺にふ
かしたさつま芋を持っていき
食べずにいると、担任の先生
が、「別に恥ずかしくないの
よ、お腹がすくでしょうから
食べなさい」と優しく声をか
けてくれました。

数日後先生も「今日は私も
お弁当はふかしたさつま芋
よ」とお話を聞かせてくれたので
しょうか。先生がおいしそう
に食べていた事を今でも鮮明
に思い出します。

その後、昭和四十四年に父
が他界し、私も昭和四十九年
に独立し、家庭を持ち、二人
の子供に恵まれ現在に至って
います。今は、苦労してこの
土地を残してくれた両親に感
謝しています。

水沢三情報

ふるさと

ふれあい牧場

(その後)

地区広報二九号(六年四月二十五日発行)で紹介しました谷町に建設中の「ふれあい牧場」では、展望広場、芝生広場、ふれあい広場、とそれらを結ぶ遊歩道の一部が完成しました。平成七年度は牛舎の改築、小動物園、場内遊歩道の工事が、進められています。



新築の

常願寺山門完成

常願寺では、昨年九月末か



ら、解体工事に入り、新しい山門の建設に取り組みましたが、四月下旬に立派な瓦葺きの山門が完成しました。左右の塀工事も続いて、行われました。

点滅信号

要注意!

(青木交差点)

これで事故はなくなるだろうと思つたのは束の間、夜十時を過ぎ、信号が点滅になつ

でもなく「ガッチャーン」とすごい音、交通事故です。



点滅信号だから特に注意して交差点を通過してほしいのに、ブレーキを踏んだ跡すらありません。くれぐれも安全確認をおこたりなく。



生活改善運動

ご寄付ありがとうございました

ご報告しました

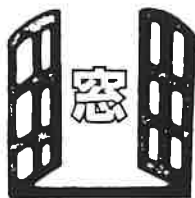
地区社協では、地区の方々からの寄付金を、町民運動会、事業や社会を明るくする運動への協力、地域の環境づくりなど、広く有意義に活用させていただいております。平成六年度は二十一名の方から総額六十二万八千円を寄付していただきました。ありがとうございます。今後とも「生活改善運動」にご協力をお願いします。十月十五日以降ご寄付いた



▼戦後五十年になりました。苦しかった経験の後世に伝えるために、特集記事にしました。

▼一月十七日未明に起きた、阪神大震災では、五、五〇人以上の死者を出し、耐震構造には自信があったはずの日本の技術が問われ直される結果となりました。

▼「輝いてます この人」欄に登場していただく方を、推せんしてください。お待ちしています。



水沢野田町 加藤

「すいざわに住んでいれば茶園風景はごく普通の風景でお茶にふれる機会も多ければお茶に対する知識も深い。」

そう考えるのが順当ですが、農村地帯といえども、都市化が進み農業従事人口が減少の一途をたどる中、水沢に在住していても親とは別棟で農業に直接には関係のない家族が増えています。

実は水沢に住んでいてもお茶に対して十分に理解している人は、少なくなっているのかもしれない。

毎年五月のはじめに四日市茶業振興センター、星の広場を中心に篤農家の茶園をお借りして、お茶摘み体験会を開催

感動と出会いがあるかも

お茶摘み体験会

しています。

はじめは、茶畑オーナー制度といってましたが、今では茶摘み体験会といえます。

今年も五月三日に行われる予定ですが、消費者主体の事業からもう少し水沢地区の人

せっかく水沢に住んでいながらお茶にふれる機会が少くない人でも、お茶摘みを体験することで地元の理解につなが

がると思います。

お茶づくりに携わっている人にはあたりまえの事でも、

